

弱者犠牲の歴史 忘れずに

長崎大熱帯医学研究所教授

山本 太郎さん

新型コロナ 改正法 運用は

今はワクチンや治療薬によつて感染症の流行を制御できる。それらがなかった過去は、対策が隔離しかなかった。感染していない人を守るためだが、感染者の人権を縛ってしまふ。これを社会が「仕方ない」と思ってしまう感情の根

っこは、今も変わらない。隔離を伴った感染症の負の歴史を見返すべきだった。そういう作業をしないまま今回の法改正があるように思う。アフリカやカリブ海のハイチでは、性交渉でエイズウイルスに感染した人を「悪いことをしたから」と見る風潮が

あり、差別もあった。人は因果律で見えしまふ。過去、対策と称して差別を生んできた。日本ではハンセン病患者、ヨーロッパのペスト流行ではユダヤ人が犠牲になった。改正法に盛り込まれた、営業時間短縮命令を拒んだ飲食店への過料、入院を拒否した感

染者らへの過料は、科される側の立場、社会的、経済的な影響を考えれば慎重であるべきだ。入院や営業など、個人の行動を他から強制、制限されても長続きはしない。人の目の届かない所で行う方に流れていってしまうだろう。強制や規制をしないでいい状況に、社会を変えていくやり方が重要ではないだろうか。

運用は当然、恣意的にならないようしっかりと説明が行政には求められる。われわれも注意深く見守っていく必要がある。ワクチン接種が始まらないから、何もなくていいというわけにはいかないが、感染症の歴史で弱い立場の人々が犠牲になってきたことは忘れないでほしい。



やまもと・たろう 1964年広島県生まれ。長崎大医学部卒。アフリカやハイチなどで感染症対策に従事。専門は国際保健学、熱帯感染症学。日本登山医学会認定国内山岳医。